

令和４年度 学校経営計画及び学校評価

Ⅰ めざす学校像

建学の精神に則り、未来を生き抜くことができる資質・能力を培い、社会に貢献する自立した女性を育てる学校をめざす。本校では、「社会に貢献する自立した女性」を育成するために必要な資質・能力を、学力・協働性・主体性の３つと考える。この３つの資質・能力を構成する、『学ぶ力、考える力、解く力、認め合う力、行動する力（KINRAN PRIDE）』を全ての教育活動を通じて育成する。 (1) 学力 ① 学ぶ力＝生涯にわたり絶えず学び続けようとする意欲・姿勢 ② 考える力＝習得した基礎的・基本的な知識・技能を、社会における様々な場面で活用できる力 ③ 解く力＝習得した知識・技能を活用して、自ら課題を発見し、その解決に向けて探究し、成果を獲得するとともに、その成果を発信する力 (2) 協働性 認め合う力＝「ありのままの自分」を認め、他者の多様な個性や価値観、文化を理解し互いを尊重し人間関係をつくる力 (3) 主体性 行動する力＝自らの役割を把握し、その役割を果たすため、自リツ(自立・自律)的に行動する力
--

Ⅱ 中期的目標

(1) 学校教育デザインの確立 ① 学校教育デザインの具体化 全ての教職員は、「これからの社会に貢献する自立した女性」を育成する学校教育デザイン（めざす学校像・生徒に育みたい力）を具体化、共有化し、生徒・保護者に発信するとともに、日々の教育活動を見直し、生徒指導、学習指導を改善する。 ② 「５つの力」の育成を実現する魅力的な学校づくりの推進 ア) グローバル人材の育成と近年強化していた英語教育の取り組みを活かした国際理解（G S）コースを設置する。 イ) 学校教育デザイン（めざす学校像・生徒に育みたい力）に向けて現コースの成果と課題を検証し、コースのカリキュラム改編を含めコースの再編を検討する。 ウ) 中学部においても、その成果と課題を検証し、円滑な中高接続ができるように、カリキュラム改編を含め中学部の充実を図る。 (2) 学力の向上 ① 学力向上策（基礎学力・学習習慣定着策）の実施 ア) 教職員は自ら「学ぶこと」の重要性を理解し、それに基づいて教育活動を行う。 イ) 多様な生き方を自分で判断し選択できる女性を育成するために、教職員は生徒に対して、「学ぶこと」の意味を理解させ、「学ぶ意欲」を喚起することで「自己効力感」を持たせる。あわせて、授業規律の確立、ICT の活用などで家庭学習の定着を図ることで、基礎学力の充実を図る。 ② 授業力の向上 教職員の授業力向上を図ることで、すべての教科において、アクティブ・ラーニングを推進し、基礎的な知識や技能を活用し、論理的に考え、まとめ、発表する力を育成する。 ③ 「総合的な探究の時間」のプログラムの確立 「総合的な探究の時間」（高校）・「総合的な学習の時間」（中学）のプログラムを確立するなかで、多様な人々・文化の出会いを通じて、コミュニケーション力、課題設定・課題解決能力を育成する。 (3) 進学実績の向上 ① ３年間・６年間を見通した進路指導体制の確立 ア) 進路指導部は、各学年・教務部と連携し実力テストや模試等の客観的なデータを活用し、高校３年間を見通した進路指導体制を確立し、これからの社会で自立して生きていくために必要とされる、進路意識の醸成としっかりとした学力を育成する。 イ) 中学部は進路指導部と連携し、中高連携を図り、高校進学を含めた６年間を進路意識の醸成としっかりとした学力を育成する。 ② キャリア教育の推進 これからの社会に貢献する自立した女性を育成するため、各コースは、金蘭会の強みである教育的リソース（大学、保育園、病院等）を活用したキャリアプログラムを確立し、社会で求められる女性の生き方、働き方を考える、３年間・６年間を見通したキャリア教育プログラムを策定する。 ③ 千里金蘭大学・金蘭会保育園との連携 千里金蘭大学とのより効果的で密接な連携により、内部進学者を増加させる。 (4) 安全安心な学校づくりと自立・自律する力の育成 ① 人間関係づくりの充実 各学年が、HRや道徳、学校行事等を通じて、生徒一人ひとりが多様な生き方を自分で判断し選択できる女性に必要とされる、自分のすばらしさを認め他者を尊重し受け入れる豊かな心を育み、多様性を尊重し共生する力、自立・自律する力を育成する。 ② 生徒の主体性の育成 生徒指導部は、生徒指導方針や学校行事の目的・意義を再確認し、多様な生き方を自分で判断し選択できる女性に必要とされる主体的に考え行動する力を育成する。 ③ 支援が必要とされる生徒への対応 ア) すべての教職員は、「支援」という観点で日々の教育活動を見直す。 イ) 生徒支援委員会は各学年と連携して、発達特性や不登校傾向生徒への支援策を検討し実施する。あわせて、スクールカウンセラーだけでなく、外部の医療機関等との連携も強化する。 (5) 魅力的な学校づくりと機能的な学校運営の確立 ① 募集広報活動の強化と体制の充実 本校がめざす新たな教育の魅力を全面的にアピールするため、保護者や受験希望者、中学校や塾等のニーズを把握し、評価と分析を徹底し効率的で効果的な募集広報戦略を立てる。 ② P D C Aサイクルの徹底 各分掌・学年は、具体的なデータや根拠に基づいた総括や評価を徹底し、課題と方針を明確にするPDCA サイクルを確立する。 ③ 組織運営体制の充実と教師力の向上 機能的な組織運営を図るため、職務の役割と責任を自覚する。計画的な人事計画のもと、適切な教員配置を実現する。また、外部教育機関等との連携を深め、教職員のスキルアップを図る。
--

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和４年実施分〕	学校運営協議会からの意見
Ⅰ 学力の向上 ●「授業満足度」保 75.8(8.2)・中 89.8(8.1)・高 71.3(14.8) ●「指導の工夫・改善」保 80.4(4.7)・中 77.6(-10.2)・高 75.1(19.9)・教 76.7 (-8.3) ●「家庭学習定着への工夫」保 77.0(6.4)・中 86.2 (3.3)高 76.9 (21.1)・教 56.7%(-8.3) ・高校では高 2 の英語表現Ⅱにおいて、高 1 のリメディアルで習熟度別授業を実施した。中学部でも従来の授業に加えて、国語、数学、英語においてもチームティーチングや習熟度別授業を実施したことにより、授業がわかりやすく、授業中に質問しやすくなったと感じる生徒が増加した。 ・学力上位層をさらに伸ばす取組みの充実をはかるため、授業づくりの研修を進める。 ●「参加体験型」中 72.4 (9.0)・高 38.5 (10.6)・教 50.0(-15.0) ●「考えをまとめ発表」生 79.0(8.1)・教 50.0 (-5.0) ●「ICT 等の活用」生 91.2(9.3)・教 90.0(5.0) ・若手教員を中心にだい金蘭若手塾を設置し、ベテラン教員のスキルを学ぶ研修を実施した。現在、『金蘭会授業スタンダード』作成の準備をしている。 ・中堅教員を核に Kinran.Lab を設置し、学校運営における課題（授業改革、制服改善、LGBTQ に関わる課題）に対して、チームリーダーを決定し課題解決に向けて提案および検討を行っている。 ・金蘭若手塾では、授業づくり・生徒理解を中心とした研修を実施した。 ・「思考力・判断力・表現力」の育成に向けた授業改善が特に高校で急務である。「総合的な探究の時間」の成果をもとに、各教科で問題解決型学習への取組みが急務である。 ・オンライン授業の実施、Chrome Book の導入などにより、ICT の活用が多く進んだ。 2. 生徒の主体性の育成 ●「学校行事」保 90.9(7.6)・生 85.8(7.3)・教 63.3(-1.7) ●「生徒自治会活動」保 92.2(10.4)・生 86.2(19.9)・教 60.0 (15.0) ●「生徒指導方針」保 81.1(2.5)・生 73.3(0.7)・教 40.0(-15.0) ●「方針への共感」保 83.6(8.0)・生 69.6(2.1)・教 73.3(-1.7) ・『生徒を主人公に』という目標のもと、蘭祭と体育祭の『生徒有志企画』、『縦割りの組編成』、『課題解決型修学旅行』等生徒が主体となった取組みが高評価となっている。 ・防寒対策として通学時に制定以外の着用を許可したり、教室内での服装について暫定的に変更を行ったが、生徒に意義の理解が不十分であった者が少なからず出てきた。 ・「生徒自身が自らの要望をどう実現していくか」、「生徒自身の役割や責任をどう自覚するか」を理解させる必要がある。『生徒を主人公に』＝『生徒は主権者に』という観点で支援するが必要である。 ・生徒指導の評価について、保護者・生徒とも上昇しているが、納得感が低い。 ●「大学等との連携」保 85.7(16.7)・生 69.1(16.7)・教 73.3(28.3) ・中学部の積極的な取組み（千里金蘭大学との連携授業、金蘭会保育園との保育交流、地域と連携した大阪の伝統産業の学習等）が高く評価されている。 ・中高一貫の取組みとして、高 1『キャリア』の授業見学を実施し、職業講話・職業体験（次年度実施）につながる中学部でのキャリア（進路）学習の充実を図っている。 ・高校では、一部教科・コースに限定され、「大学見学会」だけという従来の考え方でなく、キャリア教育の観点で継続的な高大（地域）連携体制を確立する必要がある。 ●「人権教育」保→84.8(7.6)・生 74.6(9.2)・教 31.0(1.0) ●「安心安全な環境」保 85.4(9.3)・生 80.1(7.5)・教 58.6(-1.4) ●「いじめへの対応」保 87.7(8.0)・生 76.8(3.8)・教 69.0(19.0) ●「教育相談体制」保 84.9(7.7)・生 60.5(6.5)・教 63.3(-1.7) ・生徒支援委員会を中心とした不登校生徒に対する支援体制について、保護者・生徒から評価を受けている ・教務内規の改正により、登校するが教室に入れない生徒への支援体制を確立した。 ・生徒を責任もって卒業させるためには、学力保障の仕組み、生徒相談体制とアセスメントの充実（スクールカウンセラーとの連携強化、外部機関との連携等）、担任・学年を支えるサポート体制（支援教育コーディネーターの配置）の強化などを推進する必要がある。 ・人間関係を構築する力を育てる「人間関係づくり」の取組み（アガーマネジメント、アクションプログラム等）を各学年で段階的に取り入れる必要がある。 3. 組織運営体制の改善 ●「方針の明示」教 66.7(-18.3) ●「人事配置」教 48.3(13.3) ●「教員間連携」教 31.0(11.0) ・校長の学校経営方針が明確に示されているが、学年主任から教員への周知徹底に課題がある。分掌にかかわる事項の決定の過程に企画委員会での検討がなされていない場合もあり、早期の管理職への報告、連絡、相談を行うシステムの機能化が必要である。 ・学年主任・分掌長は職責を自覚し責任を持って相互の協力体制を築き、教育課題解決の核にならなくてはならない。 ・効率的な組織運営をめざし、教員定員と仕事量を考慮し一部の係を廃止した。 ●「大学や保育所との連携」教 73.3(28.3) ●「若手教職員の育成」教 37.9(17.9) ●「授業法について検討する機会」教 31.0(6.0)●「ホームページの活用」83.3(13.3) ・金蘭若手塾や Kinran Lab. の発足で、若手が授業力向上や学校が直面する課題（制服問題等）にかかわる体制ができ、チームとしてお互いに高めあう体制ができた ・先進的な実施校訪問や研究者の招聘などの研修を実施し、直面する課題に対応した計画的な研修体制を確立する必要がある。	第 1 回 ○2022 年度学校経営計画について [学校より説明] ○学力の向上、生徒の自主性の育成、組織運営体制の改善の 3 つの柱を中心に概略を説明。 ○具体的取り組みについて ① 修学旅行について 次年度以降、『総合的な探究の時間』の教育活動の一環として明確な目的（SDGs に関わる学習、平和・人権学習、多文化理解等）をもった学習を有する時間として位置付けた。 ② 生徒の主体性の育成について 募集広報イベント（オープンスクールやらんフェス）での生徒ボランティアスタッフの企画・運営への参加、文化祭（蘭祭）の活性化（『自分たちの文化祭（蘭祭）を活発に』） ③ 学力の向上について 市民性教育の取り組み(JC・府教委との連携によるウクライナ問題の学習)、授業力向上をはかるため経験年数が浅い教員による「若手塾」の立ち上げ [質疑] (委員)「若手塾」についてよい会と感じる。若い先生方の育成について生徒とよい関係を築いていただければと感じた。 (委員)ウクライナの授業があると聞いていた。子ども自身も自国で起こっていることではない為、実感がないところがあったが授業で取り組んでもらい考える機会があるということに感謝している。また、保護者はコロナ禍で学校イベントに参加することが難しい為、文化祭の映像を拝見し、ライブ配信など目に見える機会があればよいのではない(委員)コロナ禍で変化多い時代、自分たちで立ち上がる力がとても大切だと感じている。そのような取り組みや若手塾で取り組んでいることを聞くと少しずつ活気があり自立していけると確信している。 (委員)探究の授業からこれからの入試も変わると予測される。特色入試（A0 入試）で合格した方などのヒヤリングができればもっと将来につながるのではと感じた。また、探究からキャリアに繋がり社会に役立てる女性につながる女子高の強みが生かされるのではと感じている。 第 2 回 ○令和４年度学校評価アンケートについて [学校より説明] 1. 2022 年度アンケートに基づく自己評価について議論がなされた ○学力の向上、生徒の自主性の育成、組織運営体制の改善を軸に授業アンケート・生徒、保護者、教職員アンケートの結果を基に生徒 1 人ひとりの進路を保障する為の論点整理を行った。 ① 学力向上 ・若手教員の授業力アップ、保護者・生徒・教員において高校中心に数値が上昇 ・今年度よりリメディアル教育の習熟度別授業が新たな取り組みとして結果に繋がる。今後の課題として上位層の上昇が必要である。 ・また、授業改善の他に制服検討・LGBTQ など次年度に向けた取り組みを予定 ② 生徒の自主性の育成 ・生徒の主体性の実践と育成、具体的な取り組みとして、蘭祭（文化祭）、体育祭での改革 ・修学旅行も観光型から研修型へ。高校は『総合的な探究の時間』の教育活動の一環として、中学は『道徳』の授業の一環として実施。 ・地域や社会との繋がりを軸に中学は職業講話や中高大が連携した授業を実施 ・生徒支援委員会になどで多様化した生徒対応にも継続して支援 ③ 組織運営体制の改善 ・具体的な組織運営の在り方や連携に不十分。次年度の課題として支えや意欲をもって取り組むことが必要。 [質疑] (委員)アンケート結果にて授業工夫の改善、家庭学習定着の工夫に中学と高校の差について教えていただきたい。 (副校長)高校については自主的に自学自習が既にできている為差が生じている。中学は小学校からの流れで丁寧に自学自習をさせる指導を行っているが、発達段階になるため指導の在り方に差が生じ次年度の課題となっている。 (教務)中学は 1 クラスの人数が少なくその為生徒との関係は取り組みやすいと感じている。高校は科目の数も多く係わる時間が短いため今後は中学の取り組みを参考に応用していく必要。 (校長) アンケートでは生徒・保護者が上昇、教員が低い方が良い方向が健全だと感じている。今後の課題として中学も含め学校全体で分析していくことが必要 (委員)指導工夫・改善の中学マイナスが気になる。高校はすぐ上昇している。習熟度別が結果に結果につながっていると感じているがもっと頑張りたい生徒に対してのフォローは。についての質問がなされた。 (校長)伸びる生徒をどう伸ばすかが学校全体の課題であり次年度の取り組み事案でもある。 (委員)コロナ前との行き先に差を感じていたが、学」してから行くことは学習意欲の向上に繋がると感じた。 (委員)今しか学べないことなど取り組む意欲を感じた。また、蘭祭や体育祭など自主的に取り組む姿の変化も感じている。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的 目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
Ⅰ 学校教育デザインの確立	(1) 学校教育デザインの具体化	○組織方針の立案と組織の活性化 各部長・主任は、各組織をまとめ、「5つの力」を3年間(6年間)で育成する方針を明確化し、組織間連携を深め、職員会議、企画運営委員会、教科主任会議を通じて共有化する。	●アンケート「満足度」 (保護者)95% [92%(R3)] (生徒)95% [92%(R3)] (教員)85% [75%(R3)]	(1)●「満足度」(保護者)91%(×)・(生徒)86%(×) ●「特色ある教育活動」(保護者)81%(○)・(生徒)82%(○) ●「教育方針の明示」(保護者)85%(○) ・保護者・生徒に対して、方針について理解を得ているが、現実的な取り組みが、3年間(6年間)で「5つの力」を具体化が不十分で、実践の成果を十分に伝えることができなかった。 ・科・学年・分掌が組織として、「5つの力」をどう育てるかという意思決定が不十分で、各組織間の連携も不十分であった。
	(2) 「5つの力」の育成を実現する魅力的な学校づくりの推進	① カリキュラムの充実 生徒主体の探究的な学習、教科横断型の学習等の成果を発展させるとともにカリキュラム全体に広げる。 ② コース特別プログラムの充実 進路部と教務部との連携のもと、千里金蘭大との連携を日常的な取り組みに発展させる。他の組織(医療機関、幼稚園・保育所、大学)との連携も推進する。 ③ 学力向上の取り組み 生徒の学力実態を検討し、各教科で高1での内容を充実させるとともに、高2での取り組みを検討する。また、中学部においても実施する。 ④ 中学部のカリキュラムの充実を 国・数・英におけるリメディアルの実施、職場体験や中高大連携プログラム等によるキャリア教育の実施、道徳・総合的な学習の時間の充実、千里金蘭大学・金蘭会保育園との連携強化など中学の特色化を図る。	●アンケート「特色ある教育活動」 (保護者)85% [79%(R3)] (生徒)85% [76%(R3)] (教員)70% [35%(R3)] ●アンケート「教育方針明示」 (保護者)85%[79%(R3)] ●キャリアプログラム体験週間の実施	(2)●「満足度」(教員)80%(△) ●「特色ある教育活動」(教員)25%(×) ・学年、教科・エリア、進路指導部それぞれが千里金蘭大学、金蘭会保育園、外部団体との連携を積極的に実施した。 ・中高大連携をより強化するため、高大連携担当者会議を設置した。 ・昨年度の成果と課題を生かし、高1での取り組みを学年、教科を広げて実施することができた。
2 学力の向上	(1) 学力向上策の実施	○リメディアル学習の改善・充実 [高1]到達度別授業([英語]ベーシック・アドバンス) リメディアルの充実(国数英3教科における到達度別授業) [高2]英語表現Ⅱでの到達度別授業(ベーシック・アドバンス) 中学部 [国語]中1:毎週土曜1時間実施(語彙力・読解力・表現力[読み・書き]) [数学]中1:毎週1時間をチームティーチング 中2・3:到達度別授業(ベーシック・アドバンス) [英語]中1:2学期以降、毎週1時間実施 中2: :毎週土曜1時間実施	●アンケート「授業満足度」 (保護者)75% [66%(R3)] (生徒)80% [70%(R3)] ●アンケート「授業改善」 (保護者)85% [75%(R3)] (生徒)80% [71%(R3)] (教員)90% [85%(R3)] ●アンケート「参加体験型」 (生徒)60% [44%(R3)] (教員)80% [65%(R3)] ●アンケート「考えをまとめ発表」 (生徒)80% [71%(R3)] (教員)70% [55%(R3)] ●アンケート「習熟度別指導」 (生徒)80% [74%(R3)] (教員)50% [65%(R3)] ●アンケート「家庭学習定着」 (保護者)80% [71%(R3)] (生徒)75% [65%(R3)] (教員)75% [63%(R3)] ●アンケート「キャリア教育」 (生徒)90% [80%(R3)] (教員)65% [50%(R3)] ●アンケート「生き方を考える」 (保護者)85% [77%(R3)] (生徒)70% [65%(R3)] (教員)80% [60%(R3)] ●授業公開と研究協議会の開催 ●外部講師による研修	(1)●「授業満足度」(保護者)76%(○)・(生徒)76%(○) ●「習熟度別指導」(生徒)73%(△)・(教員)40%(×) ●「家庭学習定着」 (保護者)76%(○)・(生徒)68%(△)・(教員)57%(×) ・高校では高2の英語表現Ⅱにおいて到達度別授業を実施、中学部でも従来のクラスでの取り組みだけでなく、国語、算数、英語においてもチームティーチングや到達度別授業を実施した。 ・中学部全体として実施できたが、高校においては、学年全体の取り組みにいたらなかった。 ・上位層の生徒への取り組みの充実が必要である。
	(2) 授業力の向上	① 教科主任会議の定例化(月1回第4木曜) 教科主任の役割を明確にし、生徒の学力実態の課題を明確化しカリキュラム編成や授業改善を推進する。 ② 授業・評価検討委員会の設置(月1回第4木曜) 教科主任会議で明確になった課題解決に向けて、授業改善、観点別評価、効果的・率的なカリキュラムの編成を推進する。 ③ 金蘭若手塾の実施(月1回) 教職経験2～3年目の教員を中心に、授業づくりや学びたいことについてのミニ講座による日常的な授業力向上を図る。 ④ 金蘭会授業スタンダードの作成 授業づくりに必要な要素(生徒主体の授業、生徒の力を引き出す授業)を中心に本校に学びの文化をはぐくむ授業モデルを確立するためのステップとして作成する。 ⑤ 授業改革アクションプラン検討 金蘭会の内部・外部要因を分析し、「攻める金蘭会」をめざした授業改革アクションプランを検討する。 ⑥ 公開授業の実施 授業観察や公開授業等を通じ、ベテラン教員の熟達したスキルを共有することで本校全体の授業の質を高める。 ⑦ 管理職による授業観察の実施(年2回、6月・11月実施)		(2)●「授業改善」 (保護者)80%(○)・(生徒)76%(○)・(教員)77%(×) ・金蘭若手塾やKinra.Labを設置し、授業改革を含め、学校運営における課題に対して、問題意識のある若手を中心に自主的に課題解決に向けて動き始めている。 ・金蘭若手塾では、授業づくりにおけ自主研修を実施する。Kinra.Labでも授業改革に向けてチームリーダーを決め、自主研究や公開授業に向け準備を進めている。
	(3)「総合的な探究の時間」のプログラムの確立	① 探究プログラムの確立 昨年度の実践を土台として、プログラムの構築を図る。本校での成果や先進校の取り組みを参考に、キャリア教育の観点を含め、「総合的な探究の時間」をプログラム化する。 ② 「総合的な学習の時間」(中学)のプログラム化 道徳などの成果を取り入れ、国際交流、伝統文化、食育の分野で、キャリア教育の観点を含め、 ③ 千里金蘭大学、金蘭会保育園との連携強化 各教科は、課題解決学習の実施やコース別学習の充実に向け、千里金蘭大学、金蘭会保育園や卒業生(同窓会)との連携を深める。		(3)●「キャリア教育」(保護者)96%(○)・(生徒)87%(○) ●「生き方・将来を考える」 (保護者)87%(○)・(生徒)73%(○)・(教員)52%(×) ●アンケート「大学等との連携」(保護者)86%(○) ・「総合的な探究の時間」実施2年目となり、課題解決型学習が他教科(文化理解等)にも影響を与えている。 ・3年目の来年度はプログラムの完成と、教科横断型の実践を取り組む必要がある。 ・「総合的な学習の時間」で、千里金蘭大学食物栄養学科・児童教育学科との連携授業、金蘭会保育園との保育交流、地域と連携した大阪の伝統産業の学習、地域に開かれた職業講話等を実施した。 ・キャリア教育の視点で継続的な中高大(地域)連携プログラムを確立する必要がある。

3 進学実績の向上	(1) 3年間或いは6年間を見通した、一貫した進路指導体制の確立	① 教職員研修の実施 最新の入試状況に関する研修を実施し、教員の進路指導力の向上を図る。また、教員個々の授業力の向上、カリキュラムの見直しを図る。 ② 的確な進路情報の提供 コース別進路先の明示など生徒保護者の進路意識向上に向けわかりやすくて確かな情報を提供する。 ・ 生徒や保護者が主体となる進路指導の充実「鍊成講座」(週3日)、「特別講習」 ・ 「学びのステーション」・「コース特別プログラム」(長期休業) ・ 「保護者対象進路研究会」(月1回) ① 「高大連携プログラム」の充実 高校・大学間に担当者・実務者会議を設置し、進路HR、「総合的な探究の時間」、各教科、その他学校行事等で円滑に効果的な高大連携を進める。 ② 中学部でのプログラムの充実 高校の授業見学・体験(各コース独自カリキュラム) 中2職場体験(次年度[現中1実施、現中2先行実施]、各教科での中高大連携プログラム ○千里金蘭大学との高大・中大連携の強化及び内部進学の促進	●アンケート「進路指導(連携)」 (保護者)80%[72%(R3)] (生徒)85% [75%(R3)] (教員)75%[65%(R3)] ●アンケート「進路指導(取り組み)」 (保護者)90% [79%(R3)] (生徒)80% [71%(R3)] (教員)75%[60%(R3)] ●保護者対象の進路説明会実施 ●アンケート「キャリア教育」 (保護者)90% [80%(R3)] (生徒)90% [80%(R3)] ●アンケート「生き方・将来を考える」 (保護者)85% [77%(R3)] (生徒)75% [65%(R3)] (教員)80% [60%(R3)] ●コース独自キャリアプログラムの実施 ●アンケート「大学等との連携」 (保護者)75% [45%(R3)]	(1)●「進路指導(連携)」 (保護者)86%(○)・(生徒)78%(○)・(教員)62%(×) ●「進路指導(取り組み)」 (保護者)90%(○)・(生徒)84%(○)・(教員)55%(×) ●保護者対象の進路説明会実施3回 ・進路指導プログラム(進路HR、長期休業中[夏・冬・春]の進路探求プログラム等)や進路勉強会を実施した。 ・学力上位層に向けて、鍊成授業(講座)や「特別講習」を検討する必要がある。 ・学年や担任が核となり、進路指導部と連携した3年間(6年間)を見通して、継続的・計画的な進路指導が必要である。 (2)(3) ●「キャリア教育」(保護者)96%(○)・(生徒)87%(○) ●「生き方・将来を考える」 (保護者)87%(○)・(生徒)73%(○)・(教員)52%(×) ●コース独自キャリアプログラムの実施 ●アンケート「大学等との連携」(保護者)86%(○) ・中学部では、千里金蘭大学食物栄養学科・児童教育学科との連携授業、金蘭会保育園との保育交流、地域と連携した大阪の伝統産業の学習、地域に開かれた職業講話等を実施した。 ・高校部では、教科(家庭科、1年キャリア)やエリア(子ども教育)で積極的な高大連携を実施した。 ・高校では、「大学見学会」だけという従来な考え方でなく、キャリア教育の視点で継続的な高大(地域)連携プログラムを確立する必要がある。
	(2) キュリア教育の推進			
4 安全安心な学校づくりと自立・自律する力の育成	(1) 人間関係づくりの充実	① 市民として主体的に社会に参画する力の育成 成人年齢が18歳になることを受け、生徒が主人公の楽しく充実した学校生活を送ることのできるクラス・学年集団づくりを行う。 ② 学年の3年間を見通した「学年集団づくり」方針の確定 学年主任は学年を統括し、生徒の状況の集約に努め、LHRや行事等を通じた具体的な活動方針を策定する。 ③ 主体的・自治的な取り組みの促進 学年は、学年行事(修学旅行、遠足等)での生徒による主体的・自治的な取り組みの促進を図るため、生徒実行委員会等を組織する。	●アンケート「人権教育」 (保護者)85% [77%(R3)] (生徒)75% [65%(R3)] (教員)65% [30%(R3)] ●アンケート「いじめへの対応」 (保護者)90% [80%(R3)] (生徒)80% [73%(R3)] (教員)85% [50%(R3)] ●アンケート「安心安全な環境」 (保護者)80% [74%(R3)] (生徒)80% [71%(R3)] (教員)90% [85%(R3)] ●アンケート「生徒指導方針」 (保護者)85%[79%(R3)] (生徒)80% [73%(R3)] (教員)70% [55%(R3)] ●アンケート「方針への共感」 (保護者)85% [76%(R3)] (生徒)75% [68%(R3)] (教員)90% [75%(R3)] ●アンケート「学校行事」 (保護者)90% [83%(R3)] (生徒)85% [79%(R3)] (教員)80% [65%(R3)] ●アンケート「生徒自治会活動」 (保護者)80% [73%(R3)] (生徒)75% [66%(R3)] (教員)65% [45%(R3)] ●アンケート「教育相談体制」 (保護者)85% [77%(R3)] (生徒)65% [55%(R3)] (教員)95% [65%(R3)]	(1)●「学校行事」 (保護者)90%(○)・(生徒)86%(○)・教員63(△) ●「生徒自治会活動」 (保護者)92%(○)・(生徒)86%(○)・(教員)60(△) ・蘭祭と体育祭において『生徒有志企画』または『縦割りの組編成』など生徒自治会が運営主体となり改革が進んだ。 ・防寒対策に代表されるように校則問題については、生徒の中で改正の意義の理解が不十分であった。 ・「生徒自身が自らの要望をどう実現していくか」また、「その中で生徒自身の役割や責任をどう自覚するか」という点を理解させる必要がある。 (2)●「生徒指導方針」 (保護者)81%(△)・(生徒)73%(△)・(教員)40%(×) ●「方針への共感」 (保護者)80%(△)・(生徒)70%(△)・(教員)75%(○) ・生徒指導の評価について、保護者・生徒とも上昇しているが、まだ納得感が低い。 ・保護者・生徒との意思疎通がさらに図り、生徒層の変化に対応して、指導の必要性・教育的意義をしっかりと理解し改善することができる指導に改善する必要がある。 (3)●「人権教育」 (保護者)84%(○)・(生徒)70%(○)・(教員)31%(×) ●「安心安全な環境」 (保護者)85%(○)・(生徒)80%(○)・(教員)59%(×) ●「いじめへの対応」 (保護者)87%(○)・(生徒)77%(○)・(教員)69%(△) ●「教育相談体制」 (保護者)88%(○)・(生徒)77%(○)・(教員)52%(×) ・各学年より支援の必要な生徒についてリストアップし、職員会議で共有化した。 ・今年度も、SC2名体制を取り、生徒・保護者対象の相談体制(火・土曜)を継続できた。また、担任・学年とSCとでの情報の共通化することができた。 ・来年度に向け、教務内規の改正により、不登校傾向生徒への支援体制が整えた。 ・今後、教材づくり、アセスメントの充実(スクールカウンセラーとの連携強化、外部機関との連携等)など課題を解決する必要がある。 ・人間関係を構築する力を育てる「人間関係づくり」の取り組みを各学年で段階的に取り入れる必要もある。
	(2) 生徒の主体性の育成	① 生徒自治会の活性化 生徒一人ひとりが考える「学校生活における課題」をアンケート(6月初旬実施予定)により把握し精査して、解決に向けて自治会の活動として具体化する。 ② 2022年度高校入学生以降の修学旅行の改革 中学部や先行学年の取り組み等をはじめ、教育活動の一環として『総合的な探究の時間』との連携を通して、明確な目標(SDGsに関わる学習、平和・人権学習、多文化理解等)を設定し、生徒自身が企画運営できる修学旅行にモデルチェンジする。 ③ 生徒指導方針の見直し(担当:生徒指導課) 生徒指導方針の課題を明確化し、PTA(保護者)・生徒自治会(生徒)を含めた3者で協議をすすめる。		
	(3) 支援が必要とされる生徒への対応	① 支援を必要とする生徒の情報と支援策の共有化 生徒支援委員会は、支援を要する生徒に対する情報をもとに、支援策の必要性と具体案を学年に提案する。 ② 不登校生徒対象の学習支援体制の充実 学習支援室、生徒相談室を設置する。また、学習支援方策は、状況を配慮し、授業のライブ配信などオンライン授業での方策等を活用する ③ 外部機関との連携 生徒を取り巻く関係機関(出身中学校・小学校、福祉・医療機関)との連携を強化し、生徒の実態に応じた支援を実施する。 ④ 地域との連携の強化 地域の諸機関(地元中学校・小学校、諸団体)との連携を図り、地域に貢献する生徒を育成する。		

5 魅力的な学校づくりと機能的な学校運営の確立	(1) 様々な場面を通じた効果的な募集広報活動への改革	① イベント - 生徒の成長し変化した姿など具体的な事例を多く提示したコンパクトな説明と、丁寧な個別対応の実施 - 生徒が主体的に関わるオープンスクールや生徒だけの学校説明会の実施。 ② 訪問活動 - 回数や重点地域，タイミングなどを過去の分析を進め3月から開始 - 卒業生へのアプローチなど訪問先を拡大	●中学校オープンスクール参加数 各回 20 組以上 ●中学校入試説明会参加数 各回 20 組以上 ●高校オープンスクール参加数 各回 100 組以上 ●高校入試説明会参加数 各回 100 組以上	(1)・中学入学生[17 名増]、高校入学生[38 名増]、目標である中高併せて 200 名には達しなかったが、中高併せて 180 名を達成した。 ・イベント参加者は延べ人数で中学 122 名、高校 582 名と昨年度から 100 名程度増加している。 ・イベントの実施時期について、中学入試では、1 学期を最重点期間と位置付け、4 月から 8 月の間に月 1 回オープンスクールを開催した。 ・イベントの内容について、高校入試では、各コースの学びや、リメディアル，総合的な探究など，新しい取り組みについて実際の声として具体的に伝えるものに改善した。 ・生徒記録カードを作成し、中学訪問時に持参し、卒業後の様子を定期的にお知らせすることで，信頼を得ることができた。 (2)・地域の小学生対象のわくわく教室を再開し、過去実施していた英会話や身体方だけでなく、多方面にわたる 8 講座(14 回)を実施し、延べ人数 123 名の参加を得た。 ・参加者の中から本校へ入学をした生徒がいる。
	(2) 将来安定的な中学入学者の獲得	① 出前授業の充実・外部相談会への積極的な参加(地域との連携強化 北区との連携事業授場への参加、土曜日プログラムの復活(小学生対象の英会話教室など)を復活 ② 金蘭会保育園のとの連携強化 ○各分掌学年は、具体的なデータや根拠に基づいた総括や評価を徹底し、課題と方針を明確にする P D C A サイクルを確立する		
	(3) P D C A サイクルの徹底		●学校運営協議会の実施 ●自己評価アンケート結果と学校運営協議会評価のホームページ公開	(3)・学校運営協議会を 2 回実施した ・自己評価アンケート(12 月)の結果を学校運営協議会(3 月)に報告した。
	(4) 組織運営体制の充実と教師力の向上	① 主任・部長の職責の徹底 責任を持った学年・分掌運営の徹底を図るため、生徒状況の把握と分析、学年方針の明確化と具体的な方策の実施、総括と改善策の実施などを行う。 ② 組織体制の改革 組織体制の改革を推進するため、現行の部・課体制を精査し、不必要な部署は解体しスリム化を図る。また、教員の育成の観点で人事配置も見直しを行う。	●教職員研修の実施 ●若手対象教職員研修の実施回数 ●アンケート 「教員間連携」 60% [20%(R3)] 「会議運営」 65% [55%(R3)] 「計画的な研修」 70% [55%(R3)] 「若手教員の育成」 50% [20%(R3)] 「校外研修」 60% [25%(R3)]	(4)●「教員間連携」31%(×) 「会議運営」45%(×) ●「計画的な研修」41%(×) 「若手教職員の育成」38%(△) 「校外研修」24%(×) ●「支援が必要な生徒との関わり方～本校の事例を通して」[7/25] ・校長の学校経営方針が明確に示され、教員に浸透しているが、個人と管理職(企画)とのやり取りとなる傾向はまだ改善されていない。 ・学年主任・分掌長のリーダーシップで会議の議論を活性化し、学年・分掌が教育課題解決の核にならなくてはならない。 ・金蘭若手塾や KinranLab の発足で、中堅・若手層を核に若手が授業力向上や学校が直面する課題(制服問題等)にかかわる体制ができ、チームとしてお互いに高めあう体制ができた ・先進的な取り組みや研究者(大学関係者)からの学びがなく、直面する課題に対応した計画的な研修体制を確立する必要がある。